鳴門市の方言

方言班（徳島県方言学会）

峪口有香子[1*]　岸江　信介[2]　仙波　光明[3]　久保　博雅[4]　坂田　千春[5]

要旨：鳴門市の方言の音声上の特徴として，シェ［ʃe］・ジェ［ʒe］，長音・短音化，［s］と［h］の交替が挙げられ，代表的な徳島方言あるいは下郡方言（後述）の特徴がみられる。その一方で，カ行･ガ行合拗音クヮ［kwa］･グヮ［gwa］は今回の談話内では確認できなかった。文法面では，徳島方言の特徴の１つである文末詞「デ」「ジェ」「ジョ」が確認された。原因・理由の接続助詞「から」は「ケン」の使用が多数を占め，逆接を表す接続助詞「けれども」は，ケンドの使用が目立った。語彙面においては，『日葡辞書』にみられるような，伝統的語彙を数多く残していた。

キーワード：下郡方言，伝統的音韻，大阪方言化，古語の残存，民俗説話

１．はじめに

今回の調査は，(1) 調査票を用いた，文法・表現法・語彙・アクセントに関する面接調査，(2) 自然談話の収録調査，の２種類の方法を採用した。方言談話は，実際に使用される方言を観察できるという点で有効である。調査は 2015 年 9 月に鳴門公民館･瀬戸公民館，11 月に里浦公民館に赴き調査をさせていただいた。2016 年度は，3 月に斎田公民館，5 月に川東公民館・堀江公民館・北灘公民館・大津公民館で行わせていただいた。

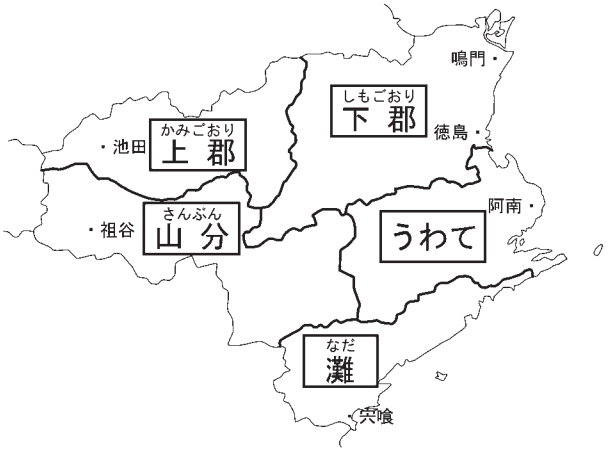

図１　徳島県における方言区画

２．方言区画上からみた鳴門市方言の位置づけ

徳島県は四国の東部に位置し，近畿方言との共通性も強くうかがえる地域である。森（1982）の徳島県の方言区画によると，鳴門市は「下郡」に属している。この地域は，徳島市・鳴門市を含む県東北部の平地を指し，大阪や京都などとほぼ同じアクセント体系を有している。

増田（1989）によると，鳴門は３つの地域に区画される。撫養を中心とする平地域の「Ａ地区」，海岸地帯の里浦・瀬戸・鳴門・北灘の「Ｂ地区」は漁業を主とし，さらに農業を中心とする大津・大麻の内陸部の「Ｃ地区」で，生活環境が大きく異なることから，方言にも差異が認められると述べている。

３．音声・音韻の特徴

ここでは，鳴門市方言の音声・音韻ならびにアクセントの特徴について報告を行う。

１）シェ [ʃe]・ジェ [ʒe]

セ［se］・ゼ［ze］が口蓋化したシェ［ʃe］・ジェ［ʒe］は，「下郡」でも顕著である。自然談話によっ

1　徳島大学大学院先端技術科学教育部博士後期課程　　2　徳島大学大学院総合科学研究部　　3　徳島大学名誉教授
4　徳島大学大学院総合科学教育部研究生　　5　徳島大学総合科学部学部生
＊　770-8506　徳島市南常三島町２－１　徳島大学大学院先端技術科学教育部

て以下のような使用が観察された。

1．タカシマノホーデモネ　ジェンジェン　チガウンデスヨ。（高島［地名］の方でも［方言が］全然違うのですよ。）
　鳴門町 70 代女性

2．スナニ　フチャクシタ　シオガ　ジェンブ。（砂に付着した塩が全部。）
　瀬戸町 70 代男性

3．モノスゴイ　ナンジェンニンモ　シンドンデ（ものすごく何千人もの［人々が］死んでしまったのだ。）
　撫養町 70 代男性

4．ミシェ　ガ　ノーナッタ。（店が無くなってしまった。）
　大麻町 70 代男性

2）長音化

単語や活用形が助詞に接続する際に長音化する現象。西日本で広く確認される現象だが，自然談話では以下のような用例が確認された。

1．ミヨリノナイ　コーオ　ヒキトッテ。（身寄りのない子どもを引き取って。）
　瀬戸町 70 代男性

2．コーユーノ　ウリヨル　ミシェーワ。（このようなものを売っている店は。）
　大麻町 70 代男性

3）短音化

長音化とは逆に，促音や長音が省略された短呼化の現象もみられる。使用例の「モロタ」は音便化した「モローター」が短呼化したものである。

1．リョーホーガ　アゲタリモロタリ　シタバアイニ　ツカウコトバヨネ。（両方があげたりもらったりした場合に使う言葉ですよね。）
　鳴門町 70 代女性

4）クヮ [kwa]・グヮ [gwa]

伝統的に使用されていたカ行・ガ行合拗音クヮ［kwa］・グヮ［gwa］であるが，現在は全国的に衰退の一途をたどっている。本調査でも確認はされなかった。

5）［s］と［h］の交替

サ行音がハ行音に交替する現象。「ソレ」が「ホレ」，「ソーデス」が「ホーデス」などといった日常使用語の範囲で高い頻度で出現し，今回の自然談話でも多くの使用例が確認された。

1．ホンナ　コトバワネー　イヨリマシタカナー。（そんな言葉はねえ，言っていましたかねえ。）
　鳴門町 70 代女性

2．イマ　ホーナットル　ジダイダワ。（今はそうなっている時代ですね。）
　撫養町 70 代男性

6）アクセント

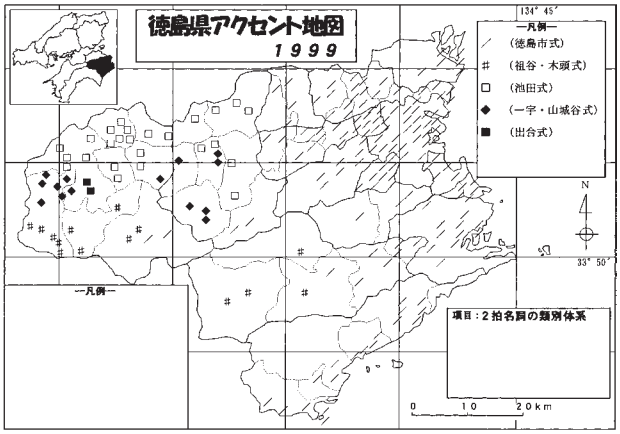

図 2　石田・岸江（1999）2 拍名詞類別体系

徳島県吉野川流域のアクセントは多くの先行研究で東西対立が指摘されており，石田・岸江（2001）では徳島市を中心とした東部地域アクセントを「徳島市式アクセント」（中央式の下位分類），三好市池田町を中心とした西部地域のアクセントを「池田式アクセント」（讃岐系変種）として分類している。

鳴門市は徳島市式アクセント地域に属する。本調査では鳴門市にお住まいの話者 14 名にアクセント調査を行った。その結果を以下に報告する。なお，鳴門のアクセント体系は「式の対立の有無と核の位置」で弁別されるアクセントである。式は，平進式（高く始まる）と上昇式（低く始まる）の二式で，平進式を H で，上昇式を L で表示する。また，核の位置を 0，1，2，3…で示した。

①1 拍名詞

類別体系は 1（H0）／2（H1）／3（L0）で概ね安定している。語単独で発音した場合 2 類語において拍内下降が，3 類語において拍内上昇が多くの話者で実現する。長音化も個人差はあるが助詞の有無に関わらず確認された。なお「鵜」は第 2 類語だ

がＨ０を優勢とする。本来この語は東京式アクセントにおいて対応の例外語として扱われるが，本地域では京阪式アクセント圏でありながら対応の例外を成すようである。

表１　１拍名詞

類	調査語彙	語単独	助詞付き
第１類	柄，蚊，子，巣，血	H	H-H
第２類	名，葉，日，藻，（鵜）	H, F	H-L, F-L
第３類	絵，木，酢，火，穂	L, R	L-H, L-L

②２拍名詞

類別体系は１（H0）／２・３（H1）／４（L0）／５（L2）で概ね安定している。徳島市式アクセントでは第５類２拍目における拍内下降は基本的に実現しないが，今回唯一大津町の男性話者から全ての語において拍内下降が確認された。

表２　２拍名詞

類	調査語彙	語単独	助詞付き
第１類	姉，飴，端，水	HH	HH-H
第２類	石，音，橋，冬	HL	HL-L
第３類	足，犬，親，雲		
第４類	息，肩，種，箸	LL, LH	LL-L, LL-H
第５類	秋，蜘蛛，鍋，窓	LH	LH-L

③３拍名詞

類別体系は一部例外も含まれるが１（H0）／２・４（H2）／５（H1）／６（L0）／７（L2）にまとめられるだろう。類ごとの例外やユレを挙げると，２類語では「小豆」のみ全話者でＬ２型をとり,「二重」ではＨ0，Ｈ2，Ｌ0，Ｌ2でユレをみせる。４類語では「明日」のみ殆どの話者でH0型をとる。５類語では「なすび」が全話者でＬ２型をとる。６類語は複雑で「兎」「鼠」では殆どの話者でＬ０型を,「背中」は全話者でＨ０型を,「高さ」「大人」はＬ０型とＬ２型でユレをみせる。

表３　３拍名詞

類	調査語彙	語単独	助詞付き
第１類	形，着物，氷，魚，今年	HHH	HHH-H
第２類	毛抜き，娘，女，（小豆，二重）	HHL	HHL-L
第４類	頭，言葉，袴，男，（明日）		
第５類	命，朝日，涙，心，（なすび）	HLL	HLL-L
第６類	兎，鼠，高さ，大人，（背中）	LLL, LLH, LHL	LLL-L, LLL-H, LHL-L
第７類	兜，薬，病，鯨，便り	LHL	LHL-L

４．文法項目

１）文末詞

文末詞は，文の最後にあって文を統括する機能を有する。鳴門市においてさまざまな文末詞を自然談話から確認することができた。

１－１）文末詞「ダ」

断定の助動詞ではなく,勧誘を表す「ダ」である。「ダ」は，勧誘・命令・詰問などの意味を強める働きがある。また，間投助詞や感動詞としても用いられる。

１．ハヨ　イコーダ。（早く行こうよ。）
　　大津町 80 代男性

１－２）文末詞「ジェ」

文末詞「ジェ」は「ゾエ」からの変化。「うわて」「下郡」で広く使用される。今回の自然談話からは，主に疑問と，告知の使用を確認できた。

１．ホージェ？（そうね？）
　　大麻町 80 代男性・鳴門町 80 代女性
２．ウタレルンジェー。（撃たれるのだよ。）
　　大麻町 70 代女性
３．アメ　フイヨレヘンノジェ？（雨降っているの？）
　　大津町 70 代女性

１－３）文末詞「デ」

「デ」は，徳島県全域に行われる文末詞であり，徳島方言の特徴の１つといわれている（金沢 1961)。鳴門市においても数々な用例を確認することができた。『徳島県言語地図』（**図３**）から鳴門市でも「デ」の使用が確認できる。

「デ」は，さまざまな意味で用いられる。１は，疑問の意味の例，２は，確信をもって自分の意志を告げる際の例である。３・４は,「ではないか」という同意を求める表現の使用例である。

１．ナンニ　ツカウンデ？（何に使うのですか？）
　　大麻町 70 代女性
２．モウ　ジキ　クルデ。（もうすぐ来ますよ。）
　　北灘町 70 代男性

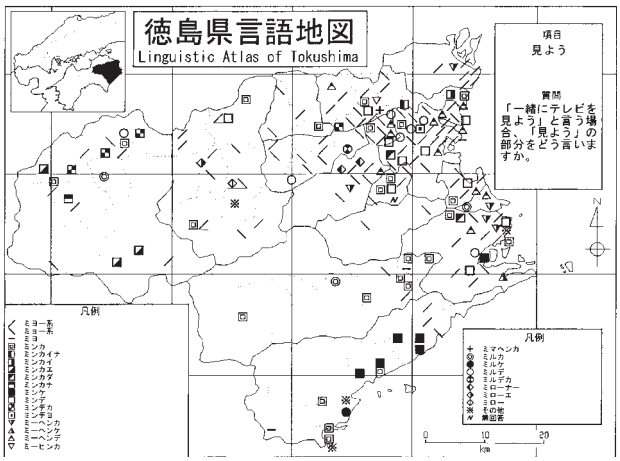

図3　仙波ほか（2002）「見よう」

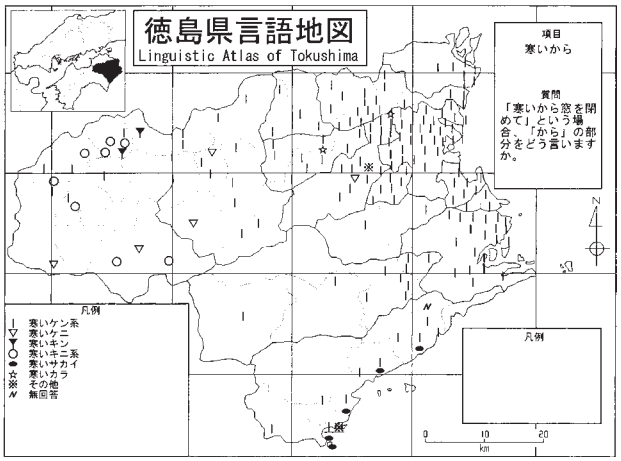

図4　仙波ほか（2002）「寒いから」

3．サーット　オッテクルデ。（サーッと追って来るのよ。）
　大津町 80 代男性

4．モノスゴイ　ナンジェンニンモ　シンドンデ。（ものすごく何千人もの［人々が］死んでしまったのだ。）
　撫養町 70 代男性

1－4）文末詞「ジョ」

徳島県下では徳島市や鳴門市が含まれる「下郡」で多く聞かれる。金沢（1961）によると，「ジョ」は「ですよ」と「ぞよ」との合流したものであるとされる。徳島県では，男性よりも女性の使用が多い文末詞である。

1．ツカウンジョ。（使うのよ。）
　撫養町 70 代女性

2）原因・理由の接続助詞「から」

徳島県においては，　ほぼ全域で「ケン」が用いられる。「下郡」や「うわて」の山間部では「ケン」の前身である「ケニ」，吉野川中流域から上流域にかけて「キン」「キニ」が使用される。県南部では「サカイ（ニ）」が注目される（**図4参照**）。鳴門市では「ケン」の使用が主で，「ケニ」「キン」「キニ」の使用は，今回の調査では確認されなかった。

1．ワエ　シットーケン。（わし知っているから。）
　大津町 80 代男性

2．ココ　ムカシ　ヤクバダッタケンナ。（ここ昔役場だったからね。）
　大津町 70 代女性

3．ムカシノ　タヌキワ　バカシヨッタケン。（昔の狸は騙していたから。）
　大麻町 80 代女性

3）逆接を表す接続助詞「けれども」

徳島方言では，ホナケンド・ホダケンドを多く用いる。金沢（1961）は，「「大阪さかえに阿波けんど」と「古来阿波の方言」を代表する語であって，阿波の人か他県の人かはこの語を使うか使わぬかによって見分ける位，頻用する語である。」と述べている。自然談話中においても，ケンドの使用が顕著である。**図5**から，ほぼ全域にケンドの使用が確認できる。

1．アメヤ　フリヨーヤケンド。（雨が降りそうだけれど）
　大津町 70 代男性

2．ホンナハナシ　キイトーケンド。（そんな話聞いているのだけど）
　大津町 70 代女性

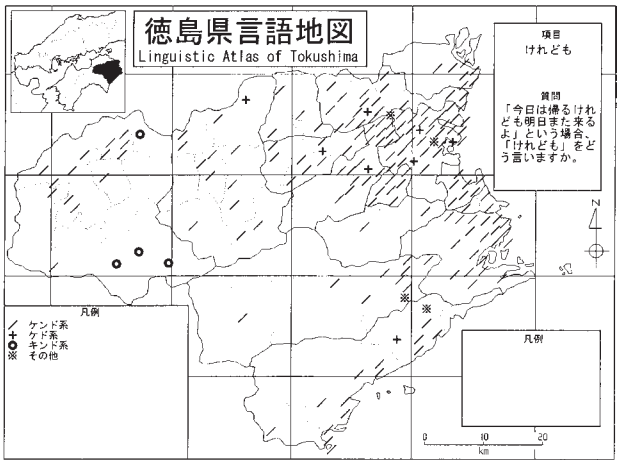

図5　仙波ほか（2002）「けれども」

4）アスペクト

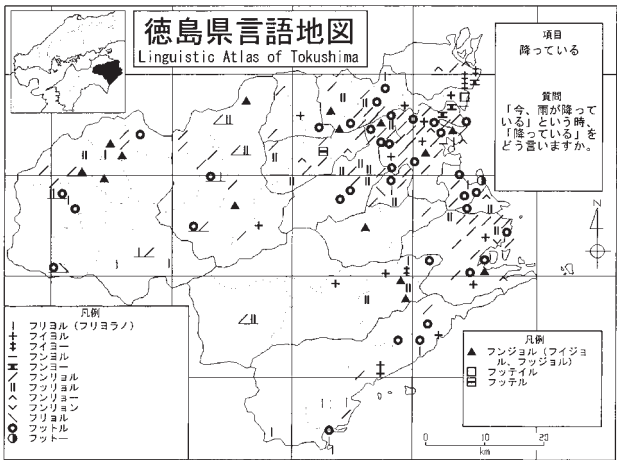

図6　仙波ほか（2002）「降っている」

広く中国・四国・九州地方では，共通語の「～ている」にあたる形式を，動作が完了せず，現在進行中である場合には「ヨル」，すでに動作が完了し，完了した状態が存続している場合には「トル」で使い分ける文法的な枠組みをもっている。**図6**は，現在進行形のケースであるが，鳴門市では「ヨル」系のフイヨー，フンヨー，フンリョルなどの回答がみられる。ただ，動詞の種類によってはヨル／トルの使い分けがなくなる傾向がみられ，「降る」など限界をもたない継続性を示す動詞では，この区別がいち早く失われている。つまり，進行形のケースでも「ヨル」に代わり「トル」が使用されることが多くなる。

4－1）トル

1．オトスツモリガ　アソコ　オチトル。（落とすつもりがあそこ［に］落ちている。）
　大津町80代女性

2．ホテ　パーット　ハリサケトンヨ。（そして，パーッと張り裂けているのよ。）
　大津町80代女性

3．イマ　ホーナットル　ジダイダワ。（今はそうなっている時代ですね。）
　撫養町70代男性

4－2）ヨル

動詞に「～ヨル」がつづく時，「歩きヨル」「歩ッキョン」「アルキヨー」になる。例4が，その例である。

1．コーユーノ　ウリヨル　ミシェーワ（このようなものを売っている店は）
　大麻町70代男性

2．ヒコーキガ　バーット　トンデキヨンヨナ。（飛行機がバーッと飛んで来ているのよね。）
　大津町80代男性

3．ハシラガ　バーット　オッテキヨンヨ。（柱がバーッと落ちてきているよの。）
　大津町80代女性

4．アルッキョン　チョクセツ　ウタレテナ。（歩いている［のに］直接撃たれてね。）
　大津町80代男性

5）断定の助動詞

談話中から「ジャ」「ヤ」の使用が確認できた。**図7**では，鳴門市は「ジャ」「ジェ」「デ」の使用がみられ，「ヤ」の使用はない。「ヤ」は近年，関西地方からの影響で新しく入ったとみることができる。特に男女差はなく，男女ともに「ジャ」「ヤ」を使用している。

5－1）ジャ

1．ホージャ　ホージャ。（そうだ。そうだ。）
　撫養町80代男性

2．オソロシカッタンジャ。（恐ろしかったよ。）
　大麻町80代女性

3．ソージャ　ソージャ。（そうだ。そうだ。）
　鳴門町70代男性

4．ホーユー　セツジャ。（そういう説だ。）
　大津町80代男性

5－2）ヤ

1．バクダンヤ。（爆弾だ。）

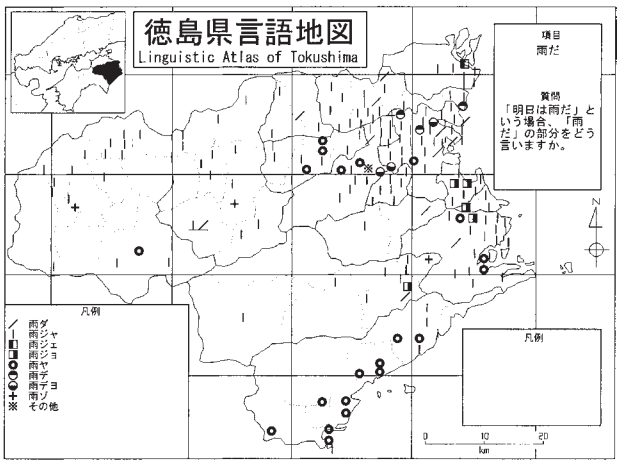

図7　仙波ほか（2002）「雨だ」

大津町 80 代男性

2．ナンカ　タベヨンヤ。（何か［を］食べているのよ。）

大津町 70 代女性

6）否定形

打ち消しの助動詞は中国四国の方言では「ン」が優勢であるが，徳島方言では東部域を中心に近畿方言と同様に，「ヘン」の使用がみられる。鳴門市においても，「ヘン」の使用の確認ができた。

1．アメ　フイヨレヘンノジェ。（雨［が］降っていないのよ。）

大津町 80 代女性

2．ンデ　アメフイヨレヘンノニ。（それで雨降っていないのに）

大津町 80 代女性

5．語彙

1）セコイ（苦しい）

「セコイ」は，「（肉体的・精神的・経済的などに余裕がなく）苦しい」ことを言う（仙波 2000）。徳島県以外では，ほぼ通用しない用法である。「うつむき仕事がせこい（苦しい）」のように使うこともある。今回の調査では，鳴門市全域で使用され続けていることがわかった。『徳島県言語地図』の状況と矛盾しない（**図 8 参照**）。ただし，川東で提供されたメモには「気が小さい」とも記されていて，共通語として一般的な意味（みみっちい）が高齢者層にも侵入していることを窺わせ，興味深い。

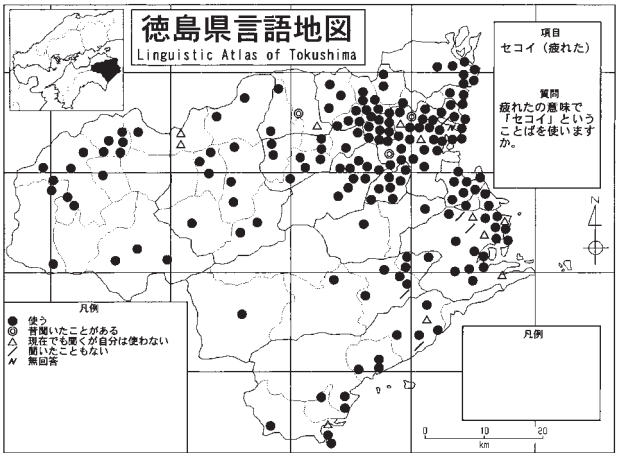

図 8　仙波ほか（2002）「セコイ（疲れた）」

2）ツッツォ（疲れの意）

「ツッツォ」とは，疲れの意で使われる。『羽ノ浦町誌方言集』では，「ツッツォ　①土まじりの米やもみ。昔は一粒の米も大切にしたので，土地に落ちた米も拾い集めて食糧にした。②たまった疲労。若イ時ノ　ツッツォガ出テ　入院シトル」と記述されている。今回の調査では，鳴門町高島・大麻町の話者からは，昔は使用していたと聞いた。主に，自分たちより上の世代が使用していたようだ。つまり，「ツッツォ」ということばは，もはや使用語彙ではなく，理解語彙になっていることがわかり，今後は消えていくことばであると予想される。

3）アババイ（眩しい）

徳島方言で，「アババイ」ということばがある。光が目に映り，眩しいことを指し，主に徳島県全域で使用されている（**図 9 参照**）。今回の調査では，鳴門市内の広い範囲で使われ続けていることがわかった。

1．アババイ　カラ　イエニ　ハイロ。（眩しいから家に入ろう。）

撫養町 70 代女性

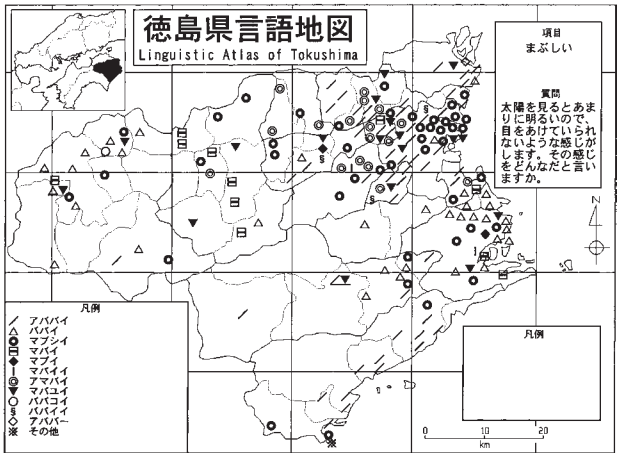

図 9　仙波ほか（2002）「まぶしい」

4）ヤネガコワル（肩こり）

「ヤネガコワル」とは，肩こりのことを指す。『木屋平村史・改訂木屋平村史』（1996）によると，「ヤネ」とは肩の意という。また，『大正期徳島市の方言補遺』では，「ヤネ」のことを肩から上膊（はく）部にかけての部分と記述している。今回の調査では，まだ使用はみられるが，徐々に使用が減っていることがわかった。

5）ダンナイ（大事無い）

「ダンナイ」は，大したことはない・構わない・さしつかえない・心配ないという意で使われる。『近世上方語辞典』（1974）では，「慶安三年・かたこと[三]「大事ないを，だんない，だいもない」文政四年カ・浪速方言「だんない・大事ないこと也，改て云ば大事おませんともいふ，御座りませぬ」宝永四年・露休置土産[三]「食うてもだんないか」」としている。

今回の調査では，男性も女性も使用するという回答を得た。

1．ダンナイ　ダンナイ。（大したことはない。大したことはない。）
　撫養町80代男性

2．ダンナイ　ダンナイ　ダイジオマヘンカ。（大したことはない。大したことはない。大事ないですか。）
　撫養町80代男性

6）エットブリ（久しぶり）

「エットブリ」は，久しぶりのことである。『近世上方語辞典』（1974）によると，「えっと」は，たんと・うんと・はるかにという意味で，「やっと」というのが普通という。

1．エットブリ　ヤノー。（久しぶりだねー）
　撫養町80代男性

7）オゲタ・オブタ（怯える）

徳島方言で，怯える・驚いたことを「オブケル（怯）」と使用する。『万葉集』や『源氏物語』にもでてくる古語である。かつては，徳島県全域で使用されていたが，今では主に高年層が使っており，鳴門市においても使用が僅かになっている。今回の自然談話から僅かに確認することができた。

1．アー　オブケター。（あー驚いた。）
　撫養町80代男性

8）サラバエル（浚（さら）えること）

「サラバエル」とは，浚えるこという。「ひとまとめにする。集める。」ことを指す。今回みられた使用例は，食べ物などが皿に残らないように食べてしまいなさいという意で使われている。

1．サラバエテ　タベテシナイナヨ。（さらえて食べてしまいなさいよ。）
　撫養町70代女性

9）ソラ（吉野川上流域の地域の意）

「ソラ」とは，徳島県全域で使用されることばで自分よりも西の地域をこのように呼ぶ。例えば，吉野川でいうと，自分よりも上流域の地域を指していう。川上にあたることばである。大麻町の調査では，上板町から西の地域を「ソラ」と呼ぶ。

和歌山県紀ノ川流域でも同様に「ソラ」ということばが使用されるが，上流が吉野川と異なり，東部に位置するので自分が住むとこよりも東部を「ソラ」と呼んでいる。また，今回の調査で，使用するか尋ねたところ，使用すると答えたのは数人であり使用が僅かになってきている。

10）グッチュー（蛇の総称）

「蛇」の総称として，「クチナワ」が全国で広く使用されてきた[1]。「グッチュー」は，この「クチナワ」から変化した形式である。「クチナワ」→「グチナワ」→「グッチュー」と変化したものであろう。「クチナワ」は，徳島県下ではところによって「グチナワ」と呼ぶところも多い。「クチナワ」を「グチナワ」というのは，「蛇」を不快な生き物として，語頭を濁音化させたからであろう。同様に「蜘蛛」を「グモ」，「蟹」を「ガニ」というのも同じ意識が働いての呼称である。

11）ヤドシ（屋根裏に居る蛇）

「ヤドシ」は，屋根裏や天井裏にいる蛇のことを指すことばである。この語形は「蛇」の総称ではなく，「青大将」を指したものである。「青大将」は，かつてどこの家にも一匹いて，家の守り神的な存在として扱われることが多かった。鼠をとって食べることでも有益な存在であった。このため，「家の主」と呼ばれたり，「里まわり」というように呼ぶ地方もある。ヤドシは，「宿主」という発想によるもので，ヤドヌシが変化して生じた語形である。

1．ムカシワ　ヤドシガ　オッタ。（昔は，屋根裏に蛇が居た。）
　鳴門町70代男性

12）ナガセ（梅雨）

「ナガセ（長雨）」とは，「梅雨」のことをいう。「ナガサメ」が「ナガセ」へと変化したものであろう。『日葡辞書』（1603－04）においても「Nagaxi（ナガシ）〈訳〉日本で夏長い間続く雨。カミでは Tçuyu（ツ

ユ）と呼ぶ。」すなわち梅雨としている。また，東條（1954）では,「梅雨」のことを,「ゴガツナガセ」と記述している。

13）ソバエ・オサダチ（にわか雨）

にわか雨のことを,「ソバエ」「オサダチ」という。「ソバエ」は，大阪府をのぞいて，ほぼ瀬戸内海全域に使用がみられることばである。藤原（1974）によると,「サダチ」は，四国東部から淡路にかけて使用がみられることばであり，今回みられた「オサダチ」も「サダチ」に接頭辞「オ」がついて「オサダチ」となったものと思われる。

1．ソバエ　ガ　フッテキタゾ。（にわか雨が降ってきたよ。）
　大麻町 80 代男性

14）アンガー（アホ・馬鹿）

アホ・馬鹿のことを何と言うかとの質問には,「アンガー」「ドアンガー」「ドアンガタマ」を使うという回答を得ることができた。これらは旧板野郡に濃い分布が見られる語である。なお,『日葡辞書』（1603－04）に「Ancŏ.l,angŏ（アンコウ，またはアンガウ）」の項目に「Ancŏ.l,ancŏna mono.（鮟鱇（あんこう）.または，鮟鱇な者）あの愚鈍な鮟鱇と同じような阿呆，すなわち，馬鹿者」とあるのが，その由来である。

6．伝説・民話

1）狸にばかされた話①

大津町の 80 代女性より狸にばかされた話を聞くことができた。以下に掲載する。

ムカシワナ。　コーアルイテイキヨッタラ
昔はね。　こう歩いて行っていたら

シオハマトコデ。　アノ　ドナイヤラユート。
塩浜所で。　あの　どうだったと言うと。

バカサレテ。　チョード　タヌキニ　バカサレテト
騙されて。　ちょうど　狸に　騙されたと

キータハナシガ　アリマス。
聞いた話が　あります。

オサケオ　ノンデネー。
お酒を　飲んでね。

ホンデ　アノ　ナルトノホーカラ　カエッテ
それで　あの　鳴門の方から　帰って

キヨッタラ　ワタシヤ　イナカノホーヤケン。
来ていたら　私たち　田舎の方だから。

ホタラナニヤ　ヒヒヒヒーン　ユーテ　ウマガ
そうしたら何か　ヒヒヒヒーン　と言って　馬が

ナキゴエガ　シヨーケンナ　ドシタンカイナト
鳴き声が　していたからね　どうしたのかなと

オモテ　イタラナ。
思って　行ったらね。

ホタラナ　キレーナ　ナンテユーン　アノ
そうしたらね　綺麗な　何て言うの　あの

オンナノ　タヌキガ　オッタケン。
女の　狸が　居たから。

タヌキガ　チョット　ワタシヤキテ
狸が　ちょっと　私が来て

ヨンジューネンマエニナ　アシコノ
四十年前にね　あそこの

ノーキョーカーコッチ　キタケン
農協からこっち［に］　来たから

ハシガアッテ　ボロイ　コーイッタ
橋があって　古い　こう言った

ホター　アシコニ　タヌキガオッタヤユーテ
そしたら　あそこに　狸が居たと言って

マゴガナ　オンナノコノネーノホーガ　ホテ
孫がね　女の子の姉の方が　そして

ウソヤユーケンヤユーテ　シャシンニトットー。
嘘だと言うからと言って　写真に撮った。

タヌキ。
狸［の］。

ムカシノ　タヌキワ　バカシヨッタケン。
昔の　狸は　騙していたから。

2）ひいお婆さんが狸に取りつかれた話②

大麻町出身の 80 代女性から，ひいお婆さんが狸に取りつかれた話を聞くことができた。以下に掲載する。

ウチラガ　ミッツ　ヨッツノ　トキクライニ。
私たちが　三つ　　四つの　　時くらいに。

ホノ　ドテニ　タヌキガ　オッタヤト。
その　土手に　狸が　　居たのだと。

ホノトキワ　ウチラモ　オソロシカッタンジャ。
その時は　　私たちも　恐ろしかったよ。

ソノトキニ。ワタシガ　ミッツ　ヨッツグライノ
その時に。　私が　　三つ　　四つぐらいの

ジブンニ。　ワタシノ　オトーサンガ　ワタシノ
時分に。　　私の　　お父さんが　　私の

オトーサンノ　オカーサンヤラノ　ハナシオ
お父さんの　　お母さんたちの　　話を

シテクレル。
してくれる。

ソコニ　タヌキガ　オッテ
そこに　狸が　　居て

タヌキガオッテ　タヌキガ　ヒーバーサンノ
狸が居て　　狸が　　ひい婆さんの

イエデ　モチツキシタリ。
家で　　餅つきしたり。

カワッタモンシタラ　　マタ　ホノ
変わったもの［を］したら　また　その

バーサンニ　タヌキガ　トリツクンヤッテ。
婆さんに　　狸が　　取りつかれたのだって。

ホンデ　バーサンガ　アタマカラ　フトンオ
それで　婆さんが　　頭から　　布団を

カブッテ　ホデ　　フトンノナカデ
被って　　そして　布団の中で

ナンカ　　タベヨンヤ。
何か［を］　食べているのよ。

ホイテ　マタ　バーサンノ　ムコサンガ　マタ
そして　また　婆さんの　　婿さんが　　また

タヌキガ　ツイトルチューテ。
狸が　　取りついていると言って。

タヌキガ　キトルッテユッテ。
狸が　　来ていると言って。

マタ　ソンナトコキテ　ワルイコトシトルンカ。
また　そんな所に来て　悪い事しているのか。

ナントカ　シタロッテユッテ。
何とか　　してあげようと言って。

バーサンニ　タヌキガ　ツイトルト。
婆さんに　　狸が　　取りついていると。

ドナイヤラ　シタルユーテナ。
どうにか　　してあげると言ってね。

ヤイトシュエルトカ　　ナントカ　スルンヤッテ。
お灸［を］すえるとか　何とか　　するのだって。

ホタラ　　タヌキガ　ゴメンナシテ
そしたら　狸が　　ごめんなさい

ゴメンナシテト　アヤマルンヤト。
ごめんなさいと　謝るのだと。

ソシタラ　　ホナイシタラ　バーサンガ
そうしたら　そうしたら　　婆さんが

フツーニナッテ　フトンナカカラ
普通になって　　布団中から

デテクルンヤト。　ヨーコーヤッテシテナ。
出てくるのだと。　ようこうしてね。

バーサン　トリツカレヨッタンヤト。
婆さん　　取りつかれていたのだと。

ドナイユン。　タヌキッテ　イウモンワ
どういうの。　狸って　　言うものは

ヨワイヒトニ　トリツクンヤト。
弱い人に　　取りつくのだと。

3）大津町で聞いた戦争の話①

大津町の80代男性より戦争の話を聞くことができた。以下に掲載する。

アノー　ワタシガネ　アノ　ショーガッコーニネ。
あのう　私がね　あの　小学校にね。

リクグンノ　アノー　ヘータイサンガチュートン
陸軍の　あのう　兵隊さんが駐屯

シトッタワケヨ。
していたわけ。

デ　ココ　ムカシ　ヤクバダッタケンナ。
で　ここ　昔　役場だったからね。

ココエ　コークータイノヒトガ　アノ　チュートン
ここへ　航空隊の人が　あの　駐屯

シトッタワケ。
していたわけ。

デ　ワタシ　タマタマ　アノー　イエガ　イマノ
で　私　たまたま　あのう　家が　今の

ヤマグッツァンノ　イエ　オッタケンナ。
山口さんの　家　居たからね。

アソコデ　アノー　ラジオオネー。　カケテ。
あそこで　あのう　ラジオをねー。　かけて。

ネンジューカケトル。
年中［ラジオを］かけている。

ホッテ　ヘータイサンガ　ネンジュー
そして　兵隊さんが　年中

キキニキヨッタ。
［ラジオを］聞きに来ていた。

ホンデ　ホノヒトトイッショニ
それで　その人と一緒に［ラジオを聞いていた時に］

クーシューケーホーガナッテ。
空襲警報がなって。

デ　ヒコーキガ　バーット　トンデキヨンヨナ。
で　飛行機が　バーっと　飛んで来ているのだね。

ホデ　ホレカラ　イマノ　アレズーット　コー
そして　それから　今の　あれずーっと　こう

ヘータイト　フタリデ　バーット　ハシッテ
兵隊さんと　二人で　バーッと　走って

イッキョッタワ。
逃げていったよ。

キジューソーシャニ　ヤラレテナ。
機銃掃射に　やられてね。

ガッコーノナ　ヤネト　ホレト　オザキノヤネト
学校のね　屋根と　それと　尾崎の屋根と

ホレト　アノ　テッドーニ　タマガ
それと　あの　鉄道に　弾が

カンカンカーンット　アタッタンデス。
カンカンカーンっと　当たったのです。

ホナ　ケーケンモアル。
そんな　経験もある。

4）大津町で聞いた戦争の話②

大津町の80代女性より戦争の話を聞くことができた。以下に掲載する。

ワタシワ　アノトキ　ジューロクヤッタケン。
私は　あの時　十六やったから。

センソーニ　オータトキ　トクシマシナイ
戦争に　あった時　徳島市内

ヤッタケン。
だったから。

イチバン　サイショワ　アノ　トクシマノ
一番　最初は　あの　徳島の

スケトーショーガッコーエ。
助任小学校へ。

アノ　ユービンキョクヤラ　チョキン
あの　郵便局で　貯金

シヨーカラ　ズット　ナランドッタンヨ。
しているから　ずっと　並んでいたのよ。

ホコエ　オチルバクダンガ　ソゲテ。
そこへ　落ちる爆弾が　　落ちて。

アノ　ガッコエ　オチタワケナンヨ。
あの　学校へ　　落ちたわけ。

ホノトキ　アワテテ　ハシッテイッタラナ。
その時　　慌てて　　走って行ったらね。

ハヨー　アシ　ドータイガ　ウマットーケン。
はやく　足　　胴体が　　埋まっているから。

アシサキガ　デトーケン。　　ガッサート
足先が　　出ているから。　ガッサーと

キトン。　　アシダケデトンヨ。
埋まっていて。　足だけ出ているのよ。

ホナケン　　ハヨーテツダエーッテユッテ
そうだから　はやく手伝えって言って

モー　テデホッタラ　ドータイガナイン。
もう　手で掘ったら　胴体が無いの。

アシダケ。　モーワタシビックリシタ。　アノトキ。
足だけ。　　もう私びっくりした。　　あの時。

7．おわりに

鳴門市の方言は，徳島県内に諸方言に比較して，いち早く大阪方言化が進んでおり，徳島県方言全体の言語変化を牽引しているといっても過言ではない。特に音声面での伝統方言の消失の傾向が県内の他方言に比して著しい。また，文法や語法面においていち早く関西方言の影響を受け，この傾向は県内全域へと伝播していく現象も多々見受けられた。一方，語彙面では，古語の残存を含め，鳴門市方言特有の方言を採取することができた。

謝辞

今回の調査では，多くの方からご教示を頂くことができた。ご協力頂いた方々のお名前も伺えなかったほどであった。以下に，お名前を記録できた方々を記し（順不同），ここにお名前を挙げることのできなかった方々も含めて感謝申し上げる。

池渕治美，中長米子，橋本国男，川上君榮，
中野久太郎，大山勝久，中村正之，三栖菊春，
濱徹，平田文雄，延本義則，延本千代江，
榎並昭雄，三原美智子，坂田健一，櫻田功一，
平田千代枝，平田忠，村澤久豊，樋口昭三郎，
青木義幸，岡田良彦，後藤益二，福島徳男，
米谷賢治，板谷富恵，橘昌宏，藍野洋三，
古林勢一郎，森弘子，西川優，村崎勝重，
榊本忠彦，三谷シゲコ，中原成起，林武久，
尾瀬榮喜雄，坂野ヒサヱ，木村花子，矢金満，
朝香重子，郡央子，大浦昌己，岡田澄子.

参考文献

石田祐子・岸江信介（2001）:「徳島県諸方言アクセントについて」『言語文化研究』8　徳島大学総合科学部

上野和昭編（1997）:『日本のことばシリーズ 36 徳島県のことば』明治書院

小野米一編（2001）:『国語学（現代語研究）報告 7 徳島県阿南市における談話生活』鳴門教育大学国語学研究室

加藤信昭（1982）:「阿波の方言」『徳島の研究』第 6 巻　清文堂

金沢治（1961）:『阿波言葉の語法』徳島市中央公民館付属図書館

金沢治（1976）:『阿波言葉の辞典』小山助学館

川島信夫・森重幸（1979）:「木頭村の方言」『総合学術調査報告　木頭村　阿波学会紀要　第 16 号』阿波学会・徳島県立図書館

岸江信介・仙波光明・岡田祐子・村田真実（2010）:「徳島県吉野川流域アクセントの動態―吉野川流域南岸グロットグラム調査報告（2）―」徳島大学大学院国語学研究室

木屋平村史編集委員会編（1996）:『木屋平村史・改訂木屋平村史』木屋平村

小学館国語辞典編集部編（2000）:『日本国語大辞典　第二版』小学館

仙波光明（2000）:「『せこい』考：徳島方言を中心に」『徳島大学国語国文学』13 徳島大学国語国文学会

仙波光明・岸江信介・石田祐子編（2002）:『徳島県言語地図』徳島大学国語学研究室

東條操編（1954）:『標準語引分類方言辞典』東京堂

土居重俊（1997）:「四国の方言」『四国方言考①（四国一般・徳島県・高知県）』ゆまに書房

橋本亀一（1939）:『阿波の國言葉』国書刊行会

羽ノ浦町誌編さん委員会編（1995）:『羽浦町誌』羽ノ浦町

藤原与一（1972）:「方言文末詞（文末助詞）の研究」『広島大学文学部紀要』31（特輯号 2）

藤原与一（1974）:『瀬戸内海言語図巻上・下巻』東京堂出版

藤原与一（1985）:『昭和日本語方言の総合的研究第 3 巻　方言文末詞〈文末助詞〉の研究（中）』春陽堂書店

前田勇編（1974）『近世上方語辞典』東京堂出版

増田明（1989）:『鳴門の方言』私家版

宮城文雄（1956）:「徳島方言概観」『徳島大学学芸紀要　人文科学』5

森重幸（1962）:「分布図からみた徳島県の方言」阿波学会報告会配布資料　私家版

森重幸（1982）:「徳島県の方言」『講座方言学 11　中国四国地方の方言』図書刊行会

1　平安時代には,「ヘミ」とともに無毒の蛇の総称であった。「へみ」はすでに「仏足石歌」などの資料にみえるが,「くちなは」は平安以降の和文脈で用いられることが多いという（『日本国語大辞典』（第二版））。

Dialect of Naruto City, Tokushima, Japan

SAKOGUCHI Yukako*, KISHIE Shinsuke, SENBA Mitsuaki, KUBO Hiromasa and SAKATA Chiharu.

* Faculty of Engineening, the Department of Information Sciences & Intelligent Systems, The University of Tokushima, 2-1, Minamijosanjima-cho, Tokushima 770-8506, JAPAN

Proceedings of Awagakkai, No.61（2017）, pp.149－160.